



「頑張る、小さい友達を思っ

神戸市立成徳小学校 六年 土橋 にと

命とはその人の個性、自分らしさを支えるものだと思います。

私は、四年生のときに三か月ほど入院しました。食事を少ない量で食べ続け、体重がとても減ってしまったからです。救急車で病院に運ばれ、緊急治療室でしばらく過ごしました。今振り返ると、緊急治療室にいたときが一番つらかったです。同じ年の子どもはいなくて、テレビを見る毎日。看護師の方たちは優しくったですが、不安でした。また、冬休み直前に入院したので冬休みに予定していた旅行を考え、より一そう暗い気持ちになりました。

入院して一、二週間経ったときに病棟が変わりました。長期入院するかもしれないからです。

新たに移動した病棟は、緊急治療室と全くちがいました。緊急治療室には赤ちゃんが多くいて、夜はいつも泣き声ばかりこえてきました。しかし、新たに移動した病棟には保育園児ぐらいの年の子や、中学生は二人ほどもいました。移動して二、

三週間は友達もつくれずにさびしかったのですが、ある出来事が起きて私はとてもかわいい友をつくりました。

それは、ある日の夜のこと。私がいた病室には三才ぐらいの子が三人ほどもいました。その日、私はテレビをお母さんと見ていました。すると、隣のベッドから話し声が聞こえてきました。子どものお母さんはトイレに行きたいけれど、その子は心細くてお母さんにそばにいてほしい、そんな様子です。私は入院する際に動物の人形を持ってきていました。お母さんと私はその人形をその子の所へ持っていき、その子のお母さんがトイレへ行ってる間に遊んであげました。

その出来事があった後、私はだんだんと友達ができてきました。初めは遊んであげた子の友達。時間が経つにつれ、中学生の女の子や私とは一才がいの子とも友達になりました。そして、友達が増えていくにつれて分かったことがあります。ある子はガンと診断されてこうがんざい治療をしていて、またある子は色々な病気にかかっていました。つらいのは私

だけではないのだと、思いました。

退院した今でも、友達になったお母さんと文通をしています。しかし、最近手紙が送られなくなってきました。一番最初に友達になった子です。私の方からも、手紙を送らないようになってきました。つらい治療をその子はしているかもしれないのに、私が楽しかったことなどを書くと、より悲しい気持ちになるかもしれないと思うからです。

私は生きたくて、命を守りたくて、つらい治療や入院を頑張る子に出会いました。その中には、私より小さい子もたくさんいました。

私は今自分が健康に、命をつないでいることにもっと感謝し、一日一日を大切に過ごしたいと入院して思いました。

講評

自分の入院体験を振り返る。最初は不安であったが、徐々に友だちができ、自分よりも小さい子ども達が自分より重い病気や辛い治療にも頑張っていることを知る。そして、健康になった今では「いのち」をつないでいけることに対する感謝を感じている。退院後に文通していた病友の母親からの手紙が途絶えたことに対して、楽しい手紙を見るのはつらいのではないかと、手紙を送るのをやめる。相手を思いやるやさしさが伝わってくる作品である。

